

無痛分娩に関する説明文書

2024. 6.25 作成

2024.11.27 改訂

無痛分娩とは腰の辺りからチューブを挿入し、局所麻酔薬を注入することで、痛みを和らげる方法です。全身麻酔ではありませんので意識は明瞭で、自分のお産の進み具合を把握し、赤ちゃんの泣き声を聞くこともできます。ただし、陣痛の痛みが完全に無くなると、分娩が進行しないため、陣痛を和らげる目的で使用します。当院では基本的には計画分娩による無痛分娩を行います。計画分娩予定日以外の日陣痛が始まってしまった場合や休日・夜間に陣痛が来た場合には自然分娩となることがあります。

□ I. 硬膜外麻酔の方法

- ① 分娩台の上で横になり、背中を丸くし腰を後ろに突き出します。
- ② 穿刺部位を確認してから背中を消毒し、腰のあたりに局所麻酔をします。
- ③ そこから針を刺し、細いチューブを挿入します。
- ④ チューブが入ったら針を抜きます。
- ⑤ そのチューブから麻酔薬を注入し、痛みを和らげます。

□ II. 無痛分娩時の注意事項

- ① 無痛分娩は、子宮口がある程度開いてから開始します。
- ② 無痛分娩中は食事の制限をさせていただく場合があります。
- ③ 麻酔薬の注入を始めたら、ベッド上で過ごします。トイレも行けないため、必要に応じて細い管を入れて導尿します。
- ④ 自動血圧計や分娩監視装置などを装着し、母体や赤ちゃんの変化に注意します。
- ⑤ 硬膜外穿刺の施行および無痛分娩の管理は、原則として産婦人科医が行っています。
- ⑥ 脊椎の手術後や脊椎の変形や出血傾向、穿刺部位の感染、その他医学的に硬膜外麻酔が困難な場合は無痛分娩を施行しません。

□ III. 分娩遷延と危険性について

無痛分娩により陣痛が弱くなり自然分娩よりも微弱陣痛や遷延分娩が起こりやすいです。硬膜外麻酔による無痛分娩時に、子宮口が全開大になった後、一定の時間が経過しても分娩が進行していないことがあります。この場合は麻

酔薬の投与量減量もしくは投与を中止し、状況によっては吸引分娩や鉗子分娩を行うこともあります。胎児心拍異常、胎児の回旋異常や分娩停止などにより吸引分娩等でも出産できない状態の場合は帝王切開となる場合があります。

□ IV. 硬膜外麻酔の合併症について

【起こりうる合併症】

① 分娩遷延

無痛分娩では、陣痛が弱くなり、分娩進行が緩徐となることがあり、子宮収縮剤による陣痛促進、吸引分娩、鉗子分娩が増加します。

② 血圧低下

麻酔をすると血管が広がり、血圧はやや低下します。血圧の低下で吐き気やめまい、

気分不良が起きます。血圧測定を連続的に行い、必要時に点滴や昇圧剤投与を行います。

③ 胎児の徐脈・胎児機能不全

無痛分娩直後に胎児心拍数が低下することがあり、多くは一過性ですが、持続する場合

は胎児機能不全の診断で吸引分娩や帝王切開などの緊急手術を行う場合があります。

④ 片側麻酔・麻酔効果の不十分

麻酔の効果が、右か左にかたよることがあります。目的とする部位に麻酔効果が得られなかった場合は、硬膜外チューブの位置の調整や、もう一度硬膜外穿刺をやり直すことがあります。結局体質的に十分な麻酔効果が得られない場合もあります。

⑤ 頭痛

麻酔中に麻酔針や麻酔カテーテルのチューブが硬膜を傷つけることがあり、このため硬膜から髄液が漏れて頭痛を起こすことが有ります。多くの場合1週間程度で治りますが、非常に強い頭痛が2週間以上続くこともあります。

⑥ 神経障害

下肢の神経障害は分娩後にまれにみられます。麻酔により神経障害が生じることもあります。無痛分娩と因果関係のない、分娩に起因するものもあります。

⑦ 発熱

硬膜外麻酔の影響で、38度以上の発熱が出ることがあります。

【極めてまれな重篤な合併症】

① 局所麻酔薬中毒

局所麻酔薬が硬膜外チューブの迷入により血管に入ることがあり、極めて稀に痙攣や呼吸停止、心停止が起こることがあります。最初の症状は耳鳴り、動悸、口の中で金属をなめたような変な味がする味覚異常、興奮などであり、適切な初期対応で重篤になるのを防止する必要があります。

② 高位・全脊髄くも膜麻酔

硬膜外麻酔で使用するカテーテルがくも膜下に迷入することにより起こります。局所麻酔薬使用後に急速に足が動かなくなり、息苦しくなるような症状が出ます。適切な初期対応で重篤になるのを防止する必要があります。

③ 硬膜外血腫・硬膜外膿瘍

硬膜外腔に出血による血腫や感染が生じ、脊髄を圧迫するほど大きくなると、神経の麻痺（両下肢の脱力、感覚低下など）が起こることがあり、早急な手術が必要となることがあります。初期の段階で急速に増悪する下肢のしびれなどの症状として出現し、起こった場合には MRI 検査などを用いた画像診断と整形外科手術による除去が必要となります。

④ 薬剤アレルギー、アナフィラキシーショック

薬剤に対するアレルギーで発疹や皮膚の発赤、重篤なものでは呼吸困難、血圧低下が起こることがあります。

上記のご説明をお読みになり、ご不明な点などがございましたら、遠慮なくご質問ください。